

東京春祭〈Geist und Kunst〉室内楽シリーズ vol.1

郷古 廉(ヴァイオリン) & 加藤洋之(ピアノ)

東方の深き闇より—横坂 源(チェロ)を迎えて

曲目解説

ヤナーチェク:ヴァイオリン・ソナタ

現存するヤナーチェク唯一のヴァイオリン・ソナタ(ヤナーチェクは本作以前に2曲のヴァイオリン・ソナタを作曲しているが、それらは散逸した)。ヤナーチェクが60歳の1914年に書かれ、その後いく度かの改訂を経て、1922年に出版・初演されている。

4楽章制をとり、東モラヴィアの民俗音楽を基調にした東洋的な色彩の濃い音楽となっている。改訂の間には第一次世界大戦が起こっており、特に終楽章・展開部のクライマックスには、ロシア軍によるハプスブルク帝国からのチェコ解放への熱い期待が込められているとされる。

マルティヌー:チェロ・ソナタ 第1番

1939年にパリで完成したこの作品には、来るべき世界大戦への不安と平和への希求が込められている。マルティヌーの故国チェコにはすでにナチスが進攻しており、切迫した状況が続いていた。初演は1940年、本曲を献呈された名チェロ奏者ピエール・フルニエと、ルドルフ・フィルクスニーのピアノで行なわれた。

3楽章構成で、第1楽章ポーコ・アレグロは、動きのある表情に富んだソナタ形式。第2楽章レントは、葬送の歩みのようなピアノ前奏に続き、チェロが朗々と主題を歌い、主題再帰後にはピアノとチェロのピチカートがカノンを繰り返す。最後は葬送の残響とともに静かに終わる。第3楽章アレグロ・コン・ブリオは、迫力ある活発なリズムの応酬と、駆け巡る16分音符の経過句が印象的なロンド。

ハチャトゥリアン:詩曲《吟遊詩人に敬意を表して》

ハチャトゥリアンは、グルジア(現ジョージア)・トビリシ出身のアルメニア人作曲家。ハチャトゥリアンと言えば「剣の舞」が有名だが、本曲はそのイメージとはまた違い、エキゾチックな詩情が隅々にまで染みわたり、濃厚な官能性すら感じさせる。作曲は1929年、ハチャトゥリアンが遅まきながらモスクワ音楽院に入った頃の作品である。

ヴラディゲロフ:ブルガリア狂詩曲《ヴァルダル》

ブルガリアの作曲家ヴラディゲロフは、民謡に根ざした技巧的な作品を広範なジャンルにわたって残し、ブルガリア音楽界において次世代へのつなぎ役を果たした。1922年に書かれた本曲は、ベルリンのドイツ劇場で指揮者を務めていた頃の作品で、彼の出世作とも言える。「ヴァルダル」とはブルガリアの西にある、北マケドニアを流れる河の名である。

ツィンツァーゼ:民謡の主題による5つの小品

ツィンツァーゼは20世紀グルジア(現ジョージア)の作曲家で、弦楽四重奏団のチェリストとしても活躍した。彼はグルジアの民謡を収集し、クラシック音楽の作品に昇華させた。本曲は1950年に作曲されたチェロとピアノのための作品。やはりグルジアの民族色が濃厚で、パーカッシブな響きを感じられる。

全5曲からなり、哀愁が漂う第1曲「馬車に乗るならず者の歌」、ピチカートのみでギターのようにリズムカルに奏される第2曲「チョングリ」、賑やかな祝宴の舞踏を思わせる第3曲「サチダオ」、一転して素朴で切ない旋律が心を打つ第4曲「ナナ」、そして最後は躍動感あふれる第5曲「踊りの音楽」で全曲を締めくくる。

エネスク:ヴァイオリン・ソナタ 第3番《ルーマニアの民俗音楽の性格で》

ルーマニアを代表する作曲家ジョルジュ・エネスクは、ヴァイオリンの名手としても才能を発揮し、パリ音楽院時代にはすでに2曲のヴァイオリン・ソナタを書き上げていた。第3番は1926年に完成した最後のヴァイオリン・ソナタで、エネスクの作品のなかでも傑作の呼び声が高い。

全3楽章からなり、ルーマニアの原風景が写し取られている。第1楽章「モデラート・マリンコーニコ」(中庸の速さで、憂うつに)は、冒頭から濃厚な民俗色が、零れ落ちるような伴奏のリズムに乗せてたゆたう。第2楽章「アンダンテ・ソステヌート・エ・ミステリオソ」(歩くような速さで、音の長さを十分に保ち、神秘的に)は、大きく3つの部分に分けられ、ヴァイオリンのハーモニクスによる幻想的な幕開けから、熱のこもった中間部を経て、穏やかな終結部へと向かう。第3楽章「アレグロ・コン・ブリオ、マ・ノン・トロポ・モツ」(陽気に歩くような速さで、ただし速すぎず)は、まるで 로마の楽師が奏でるような即興性を強く感じさせ、自在に変わるテンポや拍子が渦を巻きながら、終盤へ向かって突き進む。